

—— 同朋会運動を生きてきた北海道教区の人たち ——

第1回 吉田 法純 氏 (第4組島松寺前住職)



—— 昨年、宗祖親鸞聖人の 750 回御遠忌がつとまりました。今年は真宗同朋会運動の 50 周年ということで、あらためてこの節目を機縁として、教区教化の視点や視座を教化本部として考えていきたいと思っております。そこで今回「同朋会運動を生きてきた北海道教区の人たち」というテーマのもとに、真宗同朋会運動が現在までのように波及して、宗門から教区、教区から組、組から寺院へどのように波及しそしてまた、そこに生きてこられたお一人お一人の方にどのようなことが芽生えていったのか。そういうことを教区内の先輩たちにお話しをお伺いして、あらためてその情熱をいただいてまいりたいと思っております。最初にお聞きしたいことですが、同朋会運動の発足以前と後、同朋会運動の発足を境にして吉田さんが御自坊にお帰りになった当時の様子を、お伺いしたいと思います。たとえば法務にしても、御自坊や周りのお寺の雰囲気とか、そういう事柄に関して最初にお聞かせ願いたいと思います。

私は 31 年に大学を卒業し、自坊へ帰って来て勉強してきたけれどもこれからどうやって生きていったらいいかなど。先ず友達がほしいなという感じでね。近場の住職さん、年齢の近い人方に声を掛けたりしてね。集まりの会を作ったんです。その前の昭和 32 年に、ちょうど同朋会運動が始まる前、同朋会運動は条例では昭和 37 年の 6 月議会ですから。それ以前に同朋生活運動というような動きがありましてね。で、同朋会というよりは、伝道研修会・教学研修会というようなものが教区で行われていました。それは教区人が主催しているのではなくて、教務所主催。要するに教務所が企画立案をして、教務所員がお世話して、住職方は京都の大谷大学からお越しになった教授のお話を聞き勉強するという、

そういう伝道講習会とか教学研修会というのがあったんです。それに帰ってから参加しました。それからもう一つは東西合同研修会、今の教団連合研修会の前身です。東と西の札幌両別院。お西は札幌別院の中に教務所が内蔵してて、一つなんです。今でいえば、すすきのに東急インというホテルがあるでしょ。あそこが西本願寺だったのね。それが後に檀家代表の地崎組さんがそれを買い取って、札幌龍谷学園が西20丁目に移って、あそこにアイススケート場が出来たんですよ。結局アイススケート場の経営が上手くいかなくて、東急がホテルを建てた。東急に力がある頃ね。東西の合同の研修会も、ただ講師が来てお話しを聞いて帰るという事だけで。

それで何となく研修会に出ても、深くお寺をどうしていくか。信心を明らかにどうしたらいいか。というようなことが物足りないわけ。物足りないからある時に。その前に京都の教研。教学研修会。同朋研修会とかね。教研と言ったんですけど、それに各教区から何人か選出されて、本山で研修を受けるんですよ。僕らはじめ昭和32年の6月に10日間、本山で研修を受けたんです。その時はもう既に同朋会運動を進行していかなければならないという動き、真人社運動っていうのがあって。これが曾我量深先生を中心として、当時の同朋会運動を推進する、教団の中心になるような人方が。訓覇信雄先生だとかね・箕輪英章先生・嶺藤亮先生とか。そういう人方が動いて、10日間ずつ年2回かな。研修を受けたんです。で、その時私と、竹田日出磨さん、それから旭川の大沼庵さんと3人が選ばれて研修を受けましてね。それでまあ同朋会運動っていうか、寺が本当に寺になる。門徒が本当に門徒になる。それは、要は信心を明らかにするものであって、ただお寺さんがお経をあげて先祖を供養するような在り方。葬儀の数がたくさんあるお寺さんが優越感で。門徒戸数の少ないお寺さんが劣等感で暮らしているような。そういうのに飽き足らないというかね。そういう所で目が覚めて。

私は真宗学を4年学んだんですけど、学問というものが、お寺さんが飯を食う為の勉強をしてね。知らない人に教えていくような勉強。自分というものがどう生きてきたか。自分のいのちが何なのか。いったい何処へ人間が向かって生きているのか。本当の人間のいのちの目的は何かっていうようなところまでは、問いにならないまま、真宗学を勉強したっていうかね。そういうものに対する、ある意味では考え方が変わったというかね。転換があったというか。

帰って来てからこれは問題だというので当時の先輩、5組の山本良超さん・相河恵昭さん・秋山誠さん・手嶋圭二郎さん・8組の竹田日出磨さん・南3組の金石晃道さん・13組の寺澤長磨さん・白井豊賢さん・16組の加藤眞さん・網走の寺永弘文さん・金谷報光さん等々。その人方が研修会になると、このままでいいのかという形で。そのうちに同朋会運動が始まったんです。同朋会運動が始まった時には、同朋会運動の研修会があった時、だいぶ僕は反発したんですよ。従来の法要儀式の中で、それを進めていってもいいんじゃないかと。ということで反発したけれども形としては条例が出来て、住職・育成員、それから門徒・推進員という形でね。同朋会という会を結成して受け渡して、というよう

な形になっていくんですけどね。

まあそれよりは、形が出来ても中身の問題が大事ですけどね。そういう中で僕らの学んだことをずっと語り続けていった。その時も一番問題となったのは、特別伝道で結構ぶつかったですね。早くに同朋会運動にふれた、御門徒の方々ががんばりすぎて。門徒と住職とがぶつかったりね。住職の方はそんなに動きがなくてね。そうこうしているうちに、北海道でこのままにしておいたのでは上手くいかないということで、教化委員会を作ろうと。で、小川殊諦さんが教化委員長になって、全道で活動されておる人がピックアップされて。僕は教務委員会。ジャンルがいっぱいあってね。その中の役員になったんですよ。そして動き出したんです。それぞれ成果が上がっていった。

その時訓覇さんが、教学部長の頃かな。その頃に、教区で教化委員会をやったのはね。北海道ともう一つどっか。それまでは全部、本山の宗務役員が全国の教務所長に対してね。教化をそれぞれ教区でやりなさいというようなものだったのが、真人社が動き出してその人方がだんだん力を出すようになってから。その時は北海道では教学委員会って言ったんだね。で、教務職員は全部それぞれの仕事の事務的なものに張り付いて、お寺さんが主体で、教学委員会を始めたんですよ。それを見て本山の方でね。北海道のやり方がいいなど。だから北海道のやり方。北海道だけじゃなく。全国30教区にそれを作ろうということで条例化して。そして教化委員会条例っていうものを作ったんです。ただ、教化委員会条例の中で委員長は教務所長とする、という形で作ったんで僕らは大反対してね。で、北海道は言う事を聞かないって言ってね。熊本の尺一（かねかず）秀綱さんっていう組織部長が来て、どうしても言う事を聞いてくれって。しばらくゴタゴタしてましたけれど結局、最終的には全国の教区の条例化に納得してくれ、ということで。

訓覇さんあたりは、教務所長はお金を集めればいいような所長が多いと。教化するために教務所っていうんだから、教化をする事務所である。おまえらみんな財務所長ではないか。財務所長では駄目だ。教化の所長になれっ、という形で作ったんですよ。あれはね。だからあの教化委員会条例っていうのは本来は、教務所長の頭たたきだったんですよ。だから教務所長も真剣になってね。あんまり中央歴のないような方でもボンと教務所長になったりね。で、地元となかなか折り合いが悪かったりしてね。まあ、そんなこともありましたね。

—— 教学委員会。北海道で芽生えていった。それがまた全国へ教化委員会という形で発展していく。これは組の方ではどうだったんでしょうか？

組もね、組というものまではいかなかったですね。北海道の教学委員会はね。組も網羅して組長さんにもお願いするという形でした。

—— 組の方で具体的な教化委員会の立ち上げとなったのは？

それは条例が出来て、組長が教化委員長になったんですね。だから組長もこれは何とかやらねばならんという風になった。組長は力のある場合もあるし、もしくは自分の組内の教化で一生懸命なものに託してね。で、組長の命を受けて動き出すということになったんです。同朋会運動も、どちらかという上から旗振ったものを、言う事聞いてきたような所もないわけじゃないです。だからあんまり、僕らはどちらかという批判的に見られましたね。

それでもこれでは駄目だから、教区会に出ようっていわれてね。教区会に出た時は、同朋会推進の。はじめ教区会に出た時は、38歳くらいだったかなあ。選挙でしたけどね。その時はもう同朋会っていうものは、あまり納得っていうか、中身知らないまま一つの運動だからっていう人もいたけど。特伝でいえば、がっちり特伝講師から批判されたような住職も結構いたんでね。その方は何言ってるんだ、という調子だったですね。僕はまあみなさんのおかげではじめて教区会に出たときすぐ、学事教務の委員長になって、よーいどんから参事会です。まあ、おかげさんでね。その頃は議長が上島さん。教務所はまあ、藤津さん、経本壬寅さん。日野賢憬さん、三浦了さんとか。まあ、始まりは大変でしたよ。

—— 昭和32年の京都での教研が一つの大きな節目というか、原動力になられたというお話しでしたけれども、その頃の自坊での法座とか、現在とは大きな違いがあったのでしょうか。

中身でね。お話しと毎月の両度の御命日。報恩講と永代経とかね。御講師をまあ吟味するようになったというか。

研修会、その後の座談会を開いたりするようになったり。青年会をやりましたからね。仏青と言ったけどね。仏教青年会では一夜研修会。だいぶ続きましたね。昭和33年くらいからかな。30人くらいね。若い青年男女が集まってね。

同朋会を知りたいといって。南3組の樋口さんのお兄さんが大谷大学で教えておられて。同朋会の研究もしてて。ウィリアム・クックっていうアメリカの宗教研究者が、同朋会運動の実態を知りたいって東本願寺に来たんですね。その時に樋口さんが案内役で、北海道で同朋会運動をしているお寺を2・3ヶ所訪ねて、うちへ来たことがあるんですよ。昭和45・46年かね。その時も10人くらい集まってね。夜の研修会、質問やら何故こうやってお寺に来るようになったかっていう話しをしたんです。そういうこともありましたね。もう段々とね、自分のうちの自坊の方はやってるけども、教区の方に出る仕事やら、本山へ行く仕事やら多くなって、教師修練の手伝いだったり、補導から教導からしたりしてたんで、まあうちの方は、まあやってはいましたけどね。

—— もう一つお聞きしたいのですけれども、教学するということに関しまして現在では、いろいろな研修会が様々なところで開かれていますし、そしてまた教区の中においては北海道教学研究所があります。そういう意味では僧侶が学んでいく、教学する場所は非常に沢山広がっていることと思いますけども、当時のその学びをしていく、研鑽していく場所というものは今とは全く違う状況ではあったんでしょうか。

それは研修会を教務所主催じゃなくてね。教化委員会が主催する研修会というものにしたり。それからまあ、専修学院のOB会（道人会）。大地の会の北海道支部（旭川中心）で勉強したりね。僕も4組で会を作って。その時に白山順祐さんとか、武田昭龍さん、小泉伯瑞さん、高瀬法輪さん等々で。そういう方と連絡取って藤代聰磨先生や日野賢愷先生を囲んで勉強会をしたりしてね。それはまあ、自分達だけで講師呼んだりね。その他各組の中でも、勉強会が活動されていました。

あと教務所の研修会なども、我々が司会進行や座談会とか。そういった企画立案の中へ入って行ってね。で、北海道の教区の雇いの教化主事っていうものを置くようになりまして。予算は教区の予算の中で人件費を取って。山本良超さんになってもらって。その後竹田日出磨さんだとか。旭川の亡くなった渋谷公正さんだとかね。彼らに主事になってもらい。

それから春田義正所長の時に、仲野良俊先生をお呼びして教学研究所を作ったんです。その時僕は教学委員会の委員長でしたからね。第1回。教学委員会っていうものが、あの頃教区予算の500万円。思い切って予算組んで。今もそのくらいの予算になっておるのかよく分からんけど。人件費としてはよーいドンがもう500万円でしたからね。だから他の教区では出来ないですよ。やっぱり30教区の中でそういう教研を持つてっていうのは、あんまりないんじゃないかな。

—— それを思うと同朋会運動という、まあ、宗門あげての一つの形出来る前に、いろいろな形で、仲間同士で学習会をしたりいろんな形で、こう自らが自らの信心を確かめていくそういうその学習の場所が、いろんな形で作り上げられていった。

沸々とね。動いてきたっていうかね。

だからそういう所の研修会、出ないでまあ、すぐお寺に入った方は、同朋会運動っていう厳しい信心の討論とか、お互いを徹底的に、いうなら朝まで議論するとかっていう、そういう経験のないお寺さんと差が出来たんだね。それが同朋会運動があまりにも、急ぎすぎたためにね。そういう人方を仲間に入れるっていうようなことより、棄てる方の形になっちゃって。それがまあ、難しいところ。一つのまあ、文化大革命みたいな。精神的な動きはきびしいものがありましたから。だから、まあ今でもそういう点では、そういう信心の吟味というものが少ないでしょ。お寺さんとしての形はとれているけれども……。



—— 今のお話し頂いた、現在の研修会にしても、その信心ということを問うていくという形は取っているけれども、まあ現状として私たちも同朋会運動のさなかに僧侶になって、もう一つの形が出来た中で歩んでいますから、問題点がなかなか見いだせずにいるんですけど、研修会自体の持ち方とか内容的なものは、吉田さんの眼から見たらどのように見えますか。

僕ももうあんまり（研修会に）出ないからね。あんまり分からないから。研修会に夜の座談会なんかありますか？講師を囲んでの質疑応答とか。

—— 座談会はあります。昔の雰囲気とは違うと思いますが。

問い。問いにならんというか。問いと答えと問答するでしょ。問答深めていって、徹底的にいくような。形にならないで、お互いに傷つかない程度で終わってしまってるんでないでしょうかね。まあ、講師にもよるけれどね。そういう点が……。僕ら東大の宗教学者を御講師として呼んだ時に、別院で忘れないけど。厳しかったですよ。宗教学者っていうのはいろんな宗教研究していろいろしゃべってるけど、あんた自身のご信心は何だっていう。聞いている方、研修生の方から訊ねるんだから。私に信心はありませんけどってね。言ったらとんでもないことになって。信心のないものが宗教語れるのかって。教学や勉強でも。

自分が本当に身をもっていただいたいのちにふれて、そして念仏に出遇ったということ、を学ぶっていうか。人を動かすっていうか。そういう感動っていうものが信心の歴史ですから。だからそういう感動がないまま、理解のままいわゆる知性のままになってしまっていると、人は動かないんじゃないかな。ということを僕らは感じてきましたけれど。そういう点では教研は、仲野先生に学んだのは深まったと思います。

—— それともう一つお聞きしたいことがあるんですけど、例えば葬儀・法事、そして

また様々なところで、法話をしていくということが仕事の内容としてありますけど、その法話っていうことも同朋会を一つ境にして、その前と後で大きく変わってきたんじゃないでしょうか。

要するに同朋会運動の原点は、清沢満之先生ですから。清沢満之先生の教学っていうのは、自我的欲望の克服っていう所に信心っていうものがあるわけだから、そういう点では自我的欲望を克服するという所から考えていくと、今までのやってきたことが。長い徳川三百年の歴史の中では、政治力でね。武家、それから寺家、それから官僚のことは公家。公家と寺家と武家と、そういう大きな3つの力を全部規定するような法度が出来たんです。寺家法度とか公家法度とか武家法度とか。それで徳川家に対しては、足腰立たなくなってしまうんです。だから三百年の歴史の中では現実否定。仏法っていうのはだいたい現実否定なもんで。全部、欲望充足のための社会っていうものが、娑婆っていうものを作り上げている。それが政治ですから。そこにそれは違うよっていうところが仏教ですから。それを違うって出来ない仏教が多いわけだね。要するに全部なでなでされながら三百年の間、浄土真宗はどうしたかという、要するに真宗大系を読むように、重箱の隅をつつくような、訓詁学的な学問。文証理証、この文章はどっから来ているとかとか、どういうところにその同じような文章があるとかとか。昔の御講師は研究されて、字引みたいなもんでしょ。一切のお経、お聖教でも全部、教典でも全部そういう風になって、要するに当時の政府を批判するような事は一つもないわけ。だからお説教でも、その明治大正と同朋会運動がはじまるまでの説教の大方はね、東西含めて上見て暮らすな、下見て暮らせっていうような。深いご恩の中に生かされているぞ。念仏申したらやがて救われていくっていうような。信心決定というところに、正定聚の自覚というところに、真宗の教えがあるんだけど。お念仏申すとお浄土へ参れるというような、やがて参れるっていうような。お説教で節を使ってやってきた歴史があるんですよ。その根本には当時の幕府を批判できない流れが。

明治3年に明治政府が出来た時に、明治政府としては日本の国をどうしたら治めていけるか。徳川幕府のように武家法度で治められるわけではないから。そこで始めたのが「大教宣布」です。日本は神国だとして、神道国教化を目途としたのです。敬神愛国の思想。天皇陛下は古事記・日本書紀からみて、天照大神の高天原から、天孫降臨した天皇の国であるという形で。国体というものを敬神愛国というような形で三条の教訓というものをもって、民を治めようとしたわけです。そこから廃仏毀釈が起こった。それに対してノーと言ったのは日蓮宗でもない。天台宗でもない。真言宗でもない。そういうことは違うと言ったのは、東西本願寺の僧侶。それで三条の教訓というものを敬神愛国。神を敬い、国を愛する思想。それから天理人道に反せざる事。もう一つが詔を発すれば必ず奉ぜよ。そういう三条の教訓というものでお説教しない限り、寺をつぶすという命令が明治3年に出たんです。教部省・民部省というようなものを作って、神主と坊さんを同等の扱いにして、三条の教訓を説教しなさいという。それに対して反対したのが島地黙雷とか石川舜台とか

渥美契縁とか、東西の本願寺の碩学の人方が、当時の明治政府に断固反対して。結局明治11年に、三条の教訓を撤廃したんです。それでそういう説教はしなくてもいい、ということになったんです。

そして昭和20年。8月15日に戦争に負けて、マッカーサーが厚木の飛行場に降りたち、国交回復するまではアメリカに統治されてましたから。昭和20年の12月にマッカーサーが日本に来て、教育について神道指令という3つの命令を出したんです。一つは、天皇は神でなく人であるっていうことを日本人は知りなさいと。二つは、日本の国土というのは神様が太平洋に蒲の穂先を海につけ、その海水を垂らしたところ8つの島が出来たと（古事記の説）。大八洲という。そういう考え方を棄てなさいと。戦争が終わってもまだ日本人は、本気で思ってたんだから。三つ目は、日本の国の天皇というのは世界中のどんな国々の君主、大統領よりも一段高いところにいらっしゃるのが天皇である。そういう考え方を棄てなさい。それから日本人はその神の子であるから、外国人を劣視することを、一切平等な人間だっということを知りなさいという三つの命令を出したんです。出してもまだやっぱり、それが凝り固まっている中でお説教してきたからね。同朋会運動の中で一番大事な問題は、一切が自我から出発して他との中で優越感と劣等感の狭間で生きている我々が、優越感も劣等感も全部それは自我の所産だったというところを、明らかにして下さったのが清沢先生だからね。そこが同朋なんだから。

僕らはね、もう亡くなったけれど。東京の本願寺の離脱していった大谷光紹、新門さんですね。この人方と昭和44年。札幌別院で、北海道開教100年を勤めたんです。開申があった年に。開教100年の時に、夜の接待役を僕ら3人が命ぜられて。札幌の街、食事終わってから何件かまわったんだ。その時に新門さんに、こうして我々みたいな者とね、一緒になって肩組んで話し合う。そういうことが御同朋、御同行として大事なことじゃないでしょうか、と言ったんですよ。すると「君、勘違いしてもらっては困るよ」どうしてですか？「君たちと僕らは人種が違うんだよ。」結局あの方の母親は東久邇家出身でしょ。やっぱり人種違うんだっというんだ。それは違う。同じ人でないか、と思った。冷えたよね。酔いも覚めた。ところがそういう中に開申が出ました。そして結局昭和56年には離脱騒ぎとなり新宗憲が出来た。だから僕らはそういう考え方の、貴人信仰という言葉がありますよね。当時お上って言ったからね。その、大谷家に近付いていくような人方、少しでも人より上に立ってね。そういうのは同朋会運動じゃないんだよね。お互いに手を合わしておがみあう世界が、同朋であってね。

そういう点では本当に勉強した人は変わったと思うよ。おもしろおかしく語って。そしてお説教してまわって、そこに何の活動もしないで。僕に言わせれば、離脱寺院に行ってお説教してお布施もらっていくような僧侶。僕はそういう人に言うんだ。そんなら元に戻れっという説教しなさいって。ほんとに真宗大谷派なる教団。本当に真宗大谷派なる宗教的精神にたったならね、どういうことなのか。ご本尊って何なのかっていうことをはっきりしていかないと。いや、あそこには義理があるからとか、あそこは大事にしてくれるか



らっていう人であれば、そんなのは落語と同じでね。出し物よければ呼んで下さるから。あちこち行くっていうのでは違うのではないか。原点に帰るっていうことを、僕らは早くに教えられた。同朋会運動って言ったって、人間の原点に帰ってということなんでしょう。この世の中、男女、貧富、老少、それこそいろいろと差はあるけども。

—— 最後の一つだけお聞かせ願いたいんですけれども、これからの若い世代の、私も含めてですね、助言的なものがありましたら、それは法話に関しても、教学を研鑽していくということにおいても、もし何か……。

聞法でしょうかね。聞法しかないでしょうね。聞法を、法を聞いていくことで自分が開かれた、領いたことをやっぱり他にただして。そしてお話ししてくるっていうか。その他にはないんじゃないでしょうか。

一番先にはもう、やがて終わっていく命がね、本当の人間の目的は何かっていう、衣食住が問題か。命の上に衣食住が乗ってるんだから。衣食住なんぼがんばっても、命なくなったら終わりだから。だから本当のいのちの目的は、浄土真宗では、仏になるっていうことですからね。だから仏になるっていうことを、目的を忘れて衣食住なんぼがんばってみてもね。だからほんとのいのちの意味を明らかにしていくということが、やっぱり聞法の歩み。

大経には如来選択の本願が書いてあるわけですよ。如来選択の本願って何かっていったら、おまえのいのちの本当の意味はどういうことかっていう。衣食住、満足することではないぞっていうことが本願ですから。

まあいってみれば、世間の宗教っていうのは、この娑婆が目的になってるんだけど、どうでしょうか。浄土真宗は三世を貫く。曾我先生も鈴木大拙先生も言ったけど、普通の思想の宗教っていうのは、両親があって私が生まれてきたんだから、両親を生んだ両親・先祖。先祖を敬いすることが人間の道だ、という所で留まっているわけです。だからそれに対して先祖教の手助けをしているのが坊さんなんです。だから法事、きちんと勤めて、ちゃんと月忌参りしていればそれで道が通ると。

ところが曾我先生も鈴木大拙先生も言うのは、先祖を大事にするのはこの娑婆の親だから、この娑婆を目的としている。人間は第二の親を持たなきゃならん。第二の親とは何か。これは三世を貫くいのちの親ですよ。これが阿弥陀如来です。それで三世を貫く親を、第二の親を持たなきゃならん。それに出不遇わない限り、我々はこの娑婆から出ても行かれないわけですよ。おかげさまで、三世の親の、阿弥陀様の教えに出遇うことが出来た。

鈴木大拙先生。臨濟宗ですけど谷大の名誉教授でしたから。鈴木先生のお話しも、やっぱり超越とか、三世を貫通する教えに出遇う。それは善いか悪いか・損か得か・生きるか死ぬか・勝つか負けるか・美しいか醜いか・広いか狭いか・富めるか貧しいか。そういう二元対立の中に埋没してしまうことに、それは違うぞっていうことの観点を教えたものが

仏教だっていうんですよ。そういう第二の親に会うっていうところに気がつけば、親も大事にする。今は親も大事にしないから。お骨もどうしたらいいかわかんなくて、網棚に忘れていくような人がいるから。

—— 様々なお話を聞かせて頂き、ありがとうございました。